

統一研究大会 第2分科会

『小中高を踏まえた英語教育リーダー育成事業における 公開研究授業』実践報告と日々の授業における言語活動に ついて」

徳島県立阿波高等学校 藪下 千佳子

学習指導要領や各種研修において、言語活動を通して生徒に英語力を育成することの有効性や必要性が広く叫ばれている。昨年度に参加させていただいた「小中高を踏まえた英語教育リーダー育成事業」は、話すこと「やり取り」を軸に、小中高における指導のつながりを意識して指導方法を探究するというものであった。言語活動を組み立てて授業を実践する上で大変有意義な経験となったため、今回の分科会では他の先生方と授業づくりの過程(教科書教材をどのように言語活動へ落とし込んだのかなど)を共有させていただきたいと思った。また、研究授業ではなく、日々の授業で他校の先生方はどのような言語活動をされているのかということも全体で共有し、先生方が言語活動を考える際の一助となることを願った。ここでは、内容を抜粋して発表についてお伝えし、アンケートから見てきたことを考察したいと思う。

1 はじめに

昨年度の連携事業は小中高各校種から教員が2名ずつ参加し、大学教授の先生方がアドバイザーとなり、研究授業や指導方法などについてご助言をいただいた。高校には東京外国語大学名誉教授である根岸雅史先生が付いてくださった。定期的に全体協議会も行われ、校種ごとの現状や課題について情報共有をした後、研究授業は相互に参観した。小中学校の研究授業を拝見した際に印象的だったのは、英語でのコミュニケーションに慣れさせるための仕組みが整っていたことである。

(資料①)

小学校・中学校の研究授業：

●やり取りの「型」を教える

⇒英語でのコミュニケーションに慣れ親しむ素地の育成

“Learn from your classmates.”

“Good listeners make good speakers.”

資料①

中学校では、授業開始前から音楽や映像を流すなどリラックスした雰囲気の中、外国語学習に向けた環境を作っていた。座席の配置を工夫し、同じテーマでペアの相手を替えながら自分の意見を英

語で伝える練習を繰り返し行っていた。その中で相手の発言に反応する表現や、やり取りの「型」を身に付けるパターンプラクティスを実践されていた。また、生徒同士が互いに学び合えるように、先生が励ましの言葉を投げかけながら活動を進めていたことも印象的であった。

2 高校で必要となる“話すこと「やり取り」”の指導のポイント

やり取りの指導について:
<高校ならではのポイント>

- ①技能統合
- ②内容の深まり

<やり取りの継続に向けて必要なサポート>

- ①コミュニケーションの目的・場面・状況の適切な設定
- ②言語面と内容面からの指導

資料②

小中学校の指導を踏まえて高校で必要な指導を考えたとき、上記資料②がポイントであると考えた。一点目は、技能統合型の言語活動を一層進めていくこと、二点目は中学校までのパターンプラクティスに加えて、やり取りの「内容」を深めていくことが重要であるということである。また、生徒が取り組みやすい言語活動にするためには、適切な目的・場面・状況設定が必要であることや、中間指導を適宜行う必要があることも全体協議会で共有した。

3 研究授業の言語活動計画について

(1) 使用教材

使用教科書はMY WAY English Communication II Lesson 5 Endangered Languages であった。本文では、世界の消滅の危機にある言語の数やその要因、言語と文化は密接な関係にあることなどが紹介されていた。

(2) 単元目標を見据えた言語活動のテーマ決め

単元目標は「聞き手に自分の考えを理解してもらえるように、言語の多様性が重要であるということについて、聞いたり読んだりしたことをもとに、情報や考えなどを伝え合うことができる」である。これを見据えた上で単元末に行う言語活動を考えたとき、「消滅の危機にある言語」は生徒の日常からかけ離れたものであるため、自己関与度の高いものに落とし込めるものは無いか考えた。そこで思いついたのが「阿波弁」であった。

(3) 言語活動の中身

「阿波弁」を用いた言語活動の内容を考えるにあたり、ディベートなど様々な活動を考えた。

「目的・場面・状況は real で authentic なものに」という根岸先生のご助言や、生徒の現状とのバランスを考慮した末、落ち着いたのが右に示した最終案である。(資料③)

<最終案>
目的・場面・状況:
日本語の方言の研究に取り組む外国人言語学者の来校に備えて、将来に残したい阿波弁を伝えるための練習を行う。各グループで言語学者からのメッセージを受けて、提示された阿波弁について生徒同士で議論しながら考えや情報を伝え合う。

資料③

実際に使用した阿波弁は、「せこい」「めんどい」「～せられん」「しんだい」「かんまん」の5種類であった。生徒にとって馴染みがあり、内容の深まりを意識して意味が複数あるものを厳選した。そしてそれぞれの言葉の意味だけでなく、どのような時に使うか、誰が誰に対して使うかなど経験談も交えて話してくれることを願って選んだ。

4 指導の工夫

生徒がやり取りをスムーズに行えるように、指導の工夫として右資料④のような内容を考えた。また、下記資料⑤で示したような中間指導を入れた。そして、言語面の補助として、言葉の意味を説明する際に使える表現を提示し(資料⑥)、全体で発音練習も行った。2回目のやり取りでは、この中の表現を使って発言する生徒も見られ、補助としての役割を果たせたと感じた。

指導の工夫

①やり取りの継続に向けて

- Useful Expressions の確認
- 第一声の提示
- 目的・場面・状況設定の確認
(動画視聴、想定される会話の流れを図で確認)
- 準備時間の確保、記録係の配置

②やり取りを2回実施

より良いパフォーマンスの実現、中間指導

資料④

中間指導：

●言語面

文で話すこと / 会話の継続に協力すること / 説明する際に使用する英単語の提示

●内容面

提示された言葉の様々な意味を提示
⇒会話を広げられるように

資料⑤

中間指導で使用したスライド

- せこい **feel bad, not easy, sad, tired, too cheap(ケチな)**
- めんどい **difficult, not easy, tiresome(面倒くさい)**
- ～せられん **Don't ～.**
- しんだい **boring, feel bad**
- かんまん **OK. No, thank you.**

資料⑥

5 研究協議会

課題:

<富永教科調査官より>

●「目的」は明確であったか

⇒「目的」があり、活動への思いがかき立てられる工夫が必要

●生徒の振り返りの仕方

(目標に向かって何をすべきか)

資料⑦

課題:

<根岸先生より>

- すべきことが理解できていない生徒がいた
- 馴染みのない役を演じる難しさ
- 構造化インタビューは即興性に欠ける
- 生徒の気持ちに揺さぶりをかける大切さ

資料⑧

富永教科調査官や根岸先生からいただいたご助言から、場面や状況設定はあっても「目的」が曖昧だと、生徒も取り組みにくいということや、活動に向けて生徒の「気持ち」を乗せられる補助も必要であるということ学んだ。(資料⑦⑧)

6 日々の授業における言語活動

日々の授業で実践している

言語活動(に繋がる実践):

- ① **retelling**(様々なバリエーションで行う)
(言語活動ではない? = その後の活動に繋げるためのドリル)
- ② **Skit**
- ③ **Open Question**(推論発問など)
- ④ **本文を踏まえた活動**
(登場人物に手紙を書く、友人を誘うなど)
- ⑤ **テーマに関する意見交換** など

日々の授業では、単元を通して身に付けさせたい力から逆算して授業計画(言語活動計画)を作成し、単元末の言語活動に繋げようと心掛けている。資料⑨に示したように活動のバリエーションはあるが、それぞれの活動を生徒にとって実践可能なものにするには、ハンドアウトの工夫や動画などの視覚補助も必要である。

資料⑨

7 言語活動についてのアンケート結果

発表の最後に、分科会に参加されていた先生方にアンケートにご協力いただいた。言語活動を行うタイミングとしては以下のような結果となった。

●導入時 43% ●内容理解の時 7% ●単元末 50%

単元導入時に行う場合は、「本文の内容に関するトピックで生徒に身近な話題について自由に話させている」という回答であった。また、生徒にとって取り組みやすいものにするための工夫としては、次のような回答があった。

- ・平易な英語で教師が生徒に語る。言語活動の前に、必ず、サンプルを見せて安心させる。教師でも完璧でないので、安心して間違えていいと言い続けている。
- ・正確性を評価せず、積極的に話す姿勢を評価する部分を作ると、生徒の英語への向き合い方が変わってきたような気がする。
- ・前で事前にロールモデルを見せる。間違っても大丈夫だということを強調する。 など

先生方のご実践から見てきたのは、言語活動を行う際の工夫として、まず生徒が英語学習へ向かうための心理的ハードルを下げられる補助を充実させていらっしゃるという点である。

8 おわりに

今回、小中高連携事業に参加させていただいて研究授業を行ったことで、言語活動を設計する難しさを改めて感じた。それと同時に、教科書題材を生徒にとって身近なものに落とし込み、単元目標を意識して活動の目的・場面・状況設定を考えることは楽しい時間でもあった。しかし、大まかな活動設定ができたとしても、生徒が取り組みやすい活動にするためにはきめ細やかな「仕掛け」や「補助」が必要で、データや映像など様々なツールを用いることも必要であると気付いた。今回の発表で先生方と共有した言語活動のバリエーションをより充実したものにできれば、生徒にとって英語力向上への有意義な機会となるはずである。今回の経験を生かし、技能統合や内容の深まりを意識した言語活動を実現していけるよう、あらゆる機会を通して勉強したり、自身の英語力向上に向けて努力を続けたりするなど、研鑽を続けて参りたい。